



# 大賞

## 戦争と子供たち

田村 一哲

最近、ニュースや新聞で、戦争に関するのを見たり聞いたりするようになった。しかし、僕は平和の中で育ち、戦争を知らない。

そこで、戦争の中で子供時代をすごした祖父に話を聞いて、当時の子供たちがどんな生活をし、何を考えていたのか知りたい、と思った。

長崎に住む僕の祖父は、今年八十二歳。太平洋戦争が始まった昭和十六年、祖父は小学三年生だった。

当時の食料はどうもろこし、こうりゃん、あわ、ひえ、きび（現在では鳥のえさにするようなもの）などで、いもの粉で作っただんご、かんころもち、さつまい

も、かぼちゃなどはごちそうだった。砂とう、塩、油はなかなか手に入らず、肉類は全くなかった。

長崎は漁業がさかんな町なのに、当時は魚も手に入りなく、いわしやエイ、少しのクジラ肉があるだけだった。

家であっていたニワトリは、エサが足りなくて卵を産まなくなってしまった。

当時からアイスクャンデーはあったが、大好きなおかしや甘いものは、ほとんどなくなっていた。「白いご飯をおなかいっぱい食べたい。」と、いつも思っていた。

夜は空しゅうをさけるために、家の電気はつけられず、あんどんやろうそくを使っていた。今どちがって、テレビや本やマンガなどもなく、ご楽が全くなかった。

教科書さえ十分になく、あつてもポロポロで紙質が悪かった。ノートもほとんど手に入らなかった。

小学校では、『教育ちよく語』という、天皇陛下が国民に対して道徳や教育について教えた言葉を暗記させられ

た。覚えられない生徒は先生からしかられ、なぐられた。

体育のじゅ業では、戦争ごっこのようなことをしていた。例えば、『ミタミタ戦争』というものがある。相手にすがたを見られないように移動したりかくれたりする。もし見つかったら、相手が「見た！」とさげぶりで、この名前がついたようだ。

自分たちで作ったグライダーやプロペラ機を、校庭で飛ばす大会があった。生徒に戦争への意識を高めさせ、飛行機に興味をもたせるためのものだったと思う。

小学四、五年生までは、海水よくや川遊びにも行った。しかし、六年生以こうは空しゆうが始まり、あぶないのでそれもできなくなった。

放課後は、先生の言いつけで、畑のひ料にする馬ぶん集めをした。当時は馬車が走っていたので、道にはあちこちに馬ぶんが落ちていた。それを素手で拾って回るのだ。くさいし、きつかった。

小学校のころから、体ばつはひどかった。よく「全体

責任」と言われては、一人の行為のために全員がなぐられていた。

小学五年か六年のある日、こんなことがあった。学校のろうかで友達十人くらいとじゃれ合っていると、先生に見つかってひどくしかられた。全員こぶしで七、八発もなぐられ、他のみんなは泣いていたが、祖父だけは最初の一発で脳しんとうを起こしたのか、ただボーっとして痛みも何も感じずに立っていた。すると、祖父が泣いていないことに気づいた先生は、

「田村、(パンチが)きかなかったのか!」と、げきどし、さらに何発もなぐり続けた。体ばつが終わった後、口の中に何か固いものがあるのに気がついた。何だろうと思っ出て出してみると、なぐられた時に抜けてしまった歯だった。

体ばつは親の前でも行われた。いたずらをした子の親は、学校に呼び出される。そして、先生は親の見える前で、ばつとしてその子の足首を持ち、二階の教室の窓からさかさづりにしたのだ。

毎日のようにある体ばつは、小学生にとってきょうぶ以外の何ものでもなかった。卒業式の日には、まるでけいむ所からやっと出られるような喜びでいっぱい、うれしくてたまらなかったことを覚えている。

小学校高学年くらいからは、家に帰ってから食べ物不足をおぎなうために、家の畑仕事を手伝っていた。このころから、遊びの時間がほとんどなくなっていった。

中学校に入学するとすぐ、『軍人の五か条』（または『軍人ちよくゆ五か条』ともいう）を覚えさせられた。

総字数二千七百字の長い文だったが、覚えられないと上級生になぐられるので、必死になって覚えた。

じゅ業では、軍事教練という、兵隊になるための訓練のような時間があった。元軍人の教官が専門として教え、生徒たちはどなられたりなぐられたりと、おそろしいじゅ業だった。

また、じゅ業のいっかんとして、兵隊の仕事を手伝わされた。軍のために木を切ったり材木を運んだり、防空ごうをほったりした。夏場はのどがかわいてたまらな

かった。物資がなく、水とうもなかったのだ。

終戦間近のごく短い期間、英語のじゅ業がなくなったことがある。敵国の言葉など学ぶ必要はない、という理由からだった。

長崎に原爆が落ちた時も、祖父は長崎にいた。

その日、昭和二十年八月九日、祖父は爆心地から約5キロメートルはなれた、大浦の外人ぼ地で木登りをしていった。B29爆げき機の爆音が聞こえてきたので、急いで木からおりて防空ごうの方に向かった。

すると、白い雲の中から大きなB29が現れた。とつ然、白い気球のようなものを投下して、浦上方面へと低空で飛んでいった。

防空ごうににげこんで、当時教えられていたように目と耳を手でふさぎ、口を開けて地面にふせた。しかし、なかなか爆発音がしないので、おかしいなあと思って防空ごうの入り口を見たたん、赤だか青だか黄色だか表現のしようのない、すさまじく強い光が目に入った。次のしゅん間、「ドスン」と地面をゆるがすような強い

爆風がたたきつけ、開けていた口の中が砂だらけになった。持っていたガラスビンの中の水は、しよげきのせいかコルクの栓ごとあとかたもなく消えていたのが不思議だった。

ところで祖父が見た白い物体については、原爆資料にくわしいおばの話によると、ラジオゾンデではないかと言ふことだ。ラジオゾンデとは風圧などを測定する機械で、アメリカ軍は原爆のい力を測定するために、原爆投下の前、ラジオゾンデをパラシュートにつけて放つたという記録があるらしい。

さて、防空ごうから家に帰った祖父が見たものは、柱が折れ、屋根がわらがうき上がり、まどガラスは全て割れて飛び散り、とても住めるじようたいではなくなくなってしまったわが家だった。仕方なく、祖父は山の中にある知人の家へひなんすることにした。末の妹を背負い、もう一人の妹の手を引いて、足元も見えなくなった暗い山道を子供だけで登っていった。

その家に、竹の久保という爆心地に近い町から、被爆

した幼児が運ばれてきた。5〜6才だった。その子の家族は全員爆死し、その子一人が生き残ったらしい。

その子は、

「水、水をちょうだい。水がほしか。」

と泣いていたが、当時は被爆した人に水を与えるとすぐに死んでしまうと信じられていたので、大人たちは水を与えようとはしなかった。

最期までその子は、

「水、水・・・」

と弱々しい声で言いながら、一週間ほどで亡くなった。

祖父はその声を聞くたびに、

「かわいそうに。あんなに水をほしがっているのだから、飲ませてあげればいいのに。たとえ、水を飲んだら死んでしまおうとしても。」

とふびんで仕方なかった。

今から考えると、その子は直接的には脱水しよう状がひどくなって亡くなったのではないかと思う。もしあの時、水をあげていたら命が助かったのでは、と思うと、

今もむねがしめつけられるそうだ。

ひなんした山の家にいる時、「日本が戦争に負けた。」と、人から聞いた。すぐに思ったのは、

「アメリカ人がやって来たらどうなるのだろう。親子はなればなれにされて、どれいにされてしまうんじゃないだろうか。」

という不安だった。

戦時中は、アメリカ人というものは、肉食のおそろしい野ばんで牛でも馬でも食べるとてもこわい人たちだ、と教えられていたからだ。

しかし、実際に上陸してきたアメリカ兵を見て、そんな不安は消えた。身なりもきちんとしている上に、とてもしん士だったからだ。

祖父がへいのかげからこわごわ見た初めてのアメリカ兵は、背が高く体格もがっしりしていて、パリッとしたせい服すがたが決まっていた。皮ぐつもピカピカで、あまりのかっこよさに見とれるくらいだった。

一方、当時の日本兵は食べ物不足で体格は細く弱々

しく、服もくつも足りずにボロボロの物を身につけていた。だからアメリカ兵を実際に見た時、こんな国と戦争をしたら負けるのも仕方ないのかもしれない、と思った。

アメリカ兵は日本の子供たちにやさしく、ジープからおりてきてはチョコレートやガムをにこにこしながら配ってくれた。

ある時、祖父が長崎港にいと、船に乗ったアメリカ兵がパンをかじっているのが見えた。向こうもこちらに気づくと、そのパンを投げてよこしてくれた。受け取ったパンはとてもいいにおいで、食べると中に甘いクリームがつまっていた。これまでに味わったことのないおいしさと、む中になって食べた。

「アメリカ人はこんなおいしいものを食べているのか。」

とシヨックを受け、今でもその味は忘れられない。

祖父はエリックというアメリカ兵と友達になり、彼は友達を連れて祖父の家に遊びに来るようになった。『ほ

たるの光』を歌ってみせると、エリックが、

「どうしてその曲を知っているんだ？」

という顔をしておどろいていた。実は『ほたるの光』の原曲はスコットランド民謡なので、アメリカ人にもなじみ深いものだったのだ。

アメリカ兵は見た目だけでなく、そのふるまいもしん士だった。

例えば、おたがいの意見が食いちがう時、アメリカ兵ははげしく口論することはあっても、上官が部下をなぐりつけて言うことをきかせるようなことはなかった。上官に対して堂々と自分の意見を言うすがたに、とてもおどろいたものだ。日本では考えられないことだった。

当時の日本軍は、上官が部下をなぐるのは当たり前だった。戦時中のこと、祖父は十数人の日本兵が川から水を運んでいるところに出くわした。若い兵隊が少しおしゃべりをしたとたん、上官がやって来てしたたかになぐりつけたのだ。子供心にも、それはあまりにひどい仕打ちに思え、そのような力をふるう上官に対して、

人としてどうなのだろうとなっ得できなかった。

このように、祖父が戦中戦後の思い出を話し終わった時、僕は祖父にいくつか質問をした。

まず、小さいころに何になりたいと思っていたか、どんな夢を持っていたかを聞いた。祖父の答えは、

「軍人になって戦って死ぬことしか頭になかった。それが国のために当たり前のことだと教えこまれていた。

『何になりたい』なんて考えたこともなかったし、夢なんてなかった。」

ということだった。

次に、戦争が終わってどう思ったかは、

「『平和になってよかったなあ。』と、しみじみ感じた。」

「戦争中は日本がずっと勝っていると聞かされていたのに、実際は負け続けていたことを知って、『今までそうばかり教えられていたのか。』とショックだった。」

「アメリカ人は野ばんだと聞かされていたが、日本人はどうだったろうか。人を人としてあつかわず、学校でも

軍隊でも上の者が下の者に平気でぼう力をふるっていた日本は、野ばんだったんじゃないか。あんな時代が終わって本当によかった、と思った。」

と話してくれた。

最後に、戦争についてどう思うか聞いた。「戦争は、二度としてはいけない。人どうしが何のうらみもないのに殺し合うなんて、とても野ばんなことだ。絶対にあってはならない。」

と、今までになく強い調子で僕に言った。これだけはしっかり伝えたい、という祖父の気持ち伝わってくるようだった。

僕が祖父から聞いた話は、どれもこれも全く想像がつかないことばかりだった。

戦争についての祖父の考えは、本当にその通りだなと思った。戦争になると、周りの人たちは人間性がどんどんどんどん失われていく。今の僕たちから見ると、

「この人たち、正気なんだろうか。本当にそれが正しいか、と思ってやっているのか。」

と思う人ばかりになっていくようだ。とても信じがたい様子に思える。

祖父の言うように、戦争という野ばんなことは、二度とくり返してはいけない。だからこそ、今、自分達でできることはないのか、いつも考え、世の中の出来事に注意していきたい。しょう来、平和のために行動できるようになりたいと思う。そのためにも、本や新聞をたくさん読んで勉強し、いろんな人の意見を聞いて、本当に正しいことが何なのか、判断できる力を身につけていきたい。